

介護福祉施設におけるレクリエーション実践と介護福祉士養成校の学生に求められる知識・技術に関する一考察 ～認知症高齢者を中心に～

A Study on Recreational Practice in Care Welfare Facilities and Knowledge and Technology Required for Care Worker Training School Students

～Around the elderly with dementia～

吉 田 志 保*

Shiho Yoshida

Abstract:

In this research, using questionnaires, we clarified both recreational practice in the field of nursing care and knowledge and technology required by students of care work welfare school.

As a result, 90% of welfare officials needed recreation. On the other hand, there was a problem that for more than 50% of those had difficulty in inventing a new recreation since knowledge of recreation is insufficient.

This survey also indicated that more than 50% of facilities implement some recreations for elderly people with dementia. More than 40% of those, furthermore, expected the students of the training school to learn about recreation at school.

The results of the current study showed that care workers are required to have knowledge and skills of recreation, particularly specific knowledge and skills to design individual recreations according to the elderly people's demands and their condition, such as dementia.

キーワード：

レクリエーション実践・教育、介護福祉施設、介護福祉士養成校、認知症高齢者、個別レクリエーション

1. はじめに

1987（昭和62）年、介護に関する最初の国家資格として、「社会福祉士及び介護福祉士法」が制定された。介護福祉士の資格制度が出来てから31年が経過し、介護福祉士資格を持つ人は増加しているが、高齢化のさらなる進行や、核家族化の進行、認知症高齢者の増加など、介護の専門職である介護福祉士に求められる期待は大きくなっている。

養成校での介護福祉士養成のカリキュラムについては、2度のカリキュラム改正が行われた。2007（平成19）年の社会福祉士及び介護福祉士法の改正により、2009（平成21）年4月からカリキュラムが変更され、「人間と社会」、「介護」、「こころとからだのしくみ」の3領域に整理されることになった。その結果、従来の「レクリエーション」の科目は廃止され、「生活支援技術」の中でわずかに組

*佐野日本大学短期大学 総合キャリア教育学科 Sano Nihon University College Lecturer

み込まれることとなり、独自の科目としては無くなった。

しかし高齢者や何らかの障害を持つ利用者の尊厳や心理的・社会的支援のためには、単に利用者の身体のケアにとどまらず、その人が楽しみや生きがいを持ちながら、生活できるよう支援していくことが必要である。

レクリエーションの効果として、生活の中に楽しみを提供しコミュニケーションを図ることで、施設等におけるQOL（生活の質）の向上や心理的ケア、生活意欲の向上にもつながり大変重要である。

更に、認知症高齢者への非薬物療法としても有効であると考ええる。

本研究ではレクリエーションの必要性と、介護福祉士にとって今後、さらに重要度が増していく、認知症高齢者に対する福祉施設でのレクリエーション実践についても、明らかにしたいと考える。

II. 研究の目的

2009（平成21）年4月のカリキュラム改正により、介護福祉士養成校のカリキュラムから無くなったレクリエーションについて、福祉の現場で「どのように実践がなされているのか」、「どのようなレクリエーションが求められているのか」、「求められている介護福祉士養成校の学生に必要な知識・技術」を明らかにする。

そして認知症高齢者にとって非薬物療法としてのレクリエーションは重要であることから、介護福祉士養成校におけるレクリエーション教育の在り方についても明らかにしたいと考える。

また介護福祉の職場での認知症高齢者に対するレクリエーションや、レクリエーションの効果について職員がどのように考え取り組んでいるのかについて明らかにする。

本研究を通じて、福祉の職場で介護福祉士に求められているレクリエーションの知識・

技術について明らかにし考察する。

III. レクリエーションに関する歴史及び先行研究

1. レクリエーションとは何か

「レクリエーション」の言葉の由来は、「英語のRECREATIONを取り入れたものであり、この語は、create（つくる）という語に、re-（再び）という接頭辞を加えたものである。意味は、「再び創る」こと、つまり、「創り直し」ということになる。」（（財）日本レクリエーション協会編『レクリエーション支援の基礎』2009）¹⁾、と述べられている。

社会福祉の現場では、1987（昭和62）年に介護の専門職である「介護福祉士」の養成カリキュラムに「レクリエーション援助」が取り入れられ、レクリエーションは福祉サービスの柱の1つとして位置づけられた。（（財）日本レクリエーション協会編『レクリエーション支援の基礎』2009）²⁾によると、「レクリエーションは、本来の意味に付け加えて障害者などに対する治療的レクリエーションも取り組んでほしい。また高齢者福祉の中では、彼らの社会的存在感の充実という点からもレクリエーションは不可欠であるという考え方に基づくものである。」と述べられている。続けて、「高齢者施設で毎日行われているレクリエーションは、基本的に施設での生活の中に「楽しい時間」を作るために行われてきた。しかし最近では、ゲームやニューススポーツなどを仲間と楽しみながらリハビリに取り組んだり、子どもの頃にやった遊びや若い頃に唄った歌などを媒介に回想を促し、認知症の予防や進行を遅らせる試みをするなど、高齢者の身体機能や社会性の維持・向上を意識して行う場合が増えてる。」と述べられている。

また垣内（1994）³⁾は、介護福祉士養成テキスト『改訂 レクリエーション指導法』の中で、レクリエーションの定義を、「レクリ

ーションとは、生活を楽しむ、明るく、快くするための一切の生活上の行為である。行為とは、単に四肢の行為のみではなく、視覚、聴覚、味覚、臭覚（嗅覚）、触覚などに関連する行為をも含む」としている、つまり、「レクリエーションとは『生活の快』を求めることである。」と述べている。

福祉レクリエーションワーカー資格取得のためのテキストである、『福祉レクリエーション総論』（2007）⁴⁾によると、「レクリエーションは、決まりきったゲームやフォークダンスを無理やりさせることなく、一人ひとりの生活の快（楽しみ）を、たとえばさやかなものであっても見つけ出してあげることだ」という垣内芳子の主張は、福祉現場のレクリエーションに大きな一石を投じた。」とされている。

これらをまとめてみると、これまで日本では、集団での遊びの延長としてレクリエーションをとらえていたが、垣内芳子が定義するように、レクリエーションとは一人ひとりの生活の快（楽しみ）であり、集団レクリエーションのみならず、その人の生活や好みを大切に、一人ひとり異なった好みを持つ個人として個性に着目し、その人の望む生き方を実現できるようレクリエーションを通して援助することが必要であると言える。

また、時には認知症など何らかの困難を抱える人に対する治療的レクリエーションをも含めた幅広い援助が、レクリエーションには求められていると言える。

2. 介護福祉士養成におけるレクリエーションについての先行研究

介護福祉士養成に係るレクリエーション教育についての、先行研究を見てみると、(財)日本レクリエーション協会により、2006（平成18）年10月、「レクリエーション協会公認資格を持つ介護福祉士へのアンケート調査結果報告書 一求められる介護福祉像に向け

た養成カリキュラム・シラバスの改善、改良への寄与を目指してー」（2006）⁵⁾が出されている。

アンケートの結果から、「福祉、医療の仕事をする上でのレクリエーションの学習の重要度は、全体の9割以上が重要だ」と考えていた。また、レクリエーションの効果として、「利用者とのコミュニケーションの促進」という回答が多かった。また、次いで「生活への意欲付け」や「リハビリの意欲付けの効果」があるとの回答が多かった。レクリエーションに関する仕事の形態としては、「心身の機能の刺激を目的とした遊びの提供」がレクリエーションに関連する業務の内容としてもっとも多く挙げられていた。

次に、「介護福祉士の学習課程でレクリエーションを学習したことが、仕事に効果をもたらしていない」と否定的な評価をする回答者は、15%程度にとどまっており、現在、介護職についていると回答した人に限定すると、62%が「学習の効果がある」としていた。否定的な回答の理由として、「学習内容が利用者にあっていなかった」、「学習内容が実践的でなかった」という理由が述べられていた。

既存のレクリエーション活動援助法の授業内容ごとの重要度については、「利用者とレクリエーション」、「高齢者のレクリエーション援助」、「障害者のレクリエーション援助」といった現場での利用者への働きかけと直接関連する授業内容がより重要度が高く評価されているという傾向がみられる。」

介護福祉士養成校を卒業し、現場で活躍している介護福祉士及び、介護福祉士養成校のレクリエーション指導法担当者にアンケート調査を行った松永（1997）⁶⁾は、「介護福祉士におけるレクリエーション援助は非常に重要であるという見解は一致するものの、指導者養成に必要な内容や重要な授業内容には大きな意見の相違が見られた。また、レク担当者は、指導者として理論に

も実技にもバランスよく重点を置いているものの、卒業生は、現場ですぐ実践できる内容に重点を置く傾向が見られた。そして問題点として、レク担当者が現場で活用されていると思っている授業内容が、実際には活用されていないということであった。今後の課題として、学生が敬遠しがちな理論の授業展開を工夫することが大切であり、理論の中ではニーズが高い、レクリエーション援助の企画・立案・準備及び評価に関する授業の充実を図る事が重要であることを述べている。またニュースポーツ・軽スポーツについては両者とも低い数値を示しているものの、実際には養成校で多くの時間を費やしている矛盾について、改善する必要がある」ということを示唆している。

福祉現場の職員に対し、福祉レクリエーションの重要性や学生が身に着けるべき力の中で、福祉レクリエーションに関するものをどのように位置づけているかの意識調査を行った中島（2010）⁷⁾は、「福祉の現場の職員は「福祉レクリエーション」は63%が重要だと感じており、「レクリエーション」に関する授業が減ってしまっているのは良くないと59%が捉えおり、レクリエーションが大切な分野だと感じている」ことが分かった。

以上、介護福祉士養成校における、レクリエーション教育及び、福祉現場でのレクリエーション実践について先行研究を見てきた。先行研究では、現場の職員がレクリエーションを重要と捉えており、介護福祉士養成校の学生に対しての教育も有意義であると回答していることが分かった。

しかし、介護福祉士養成校でのレクリエーションについての講義については、現場で必要とされる即戦力や、高齢や障害により何らかの困難を抱えている人に対応するような内容や、レクリエーションのプログラム立案に関することではなく、今後教授する内容に工

夫が必要である事を示唆している。また、介護福祉士養成校で失われた科目であるレクリエーションについては、介護福祉士にとって必要な知識・技能であると述べられている。

IV. 研究方法

1. 施設または訪問介護事業所に勤務する職員に対するアンケート

(1) 調査対象者

① 2012（平成24）年5月～8月までS県にあるT介護福祉士養成校にて行われた、介護技術講習会に参加した、「施設または訪問介護事業所に勤務する職員」55人について、各介護技術講習会最終日に、質問紙による調査を実施した。回収率は100%であった。

② 「介護福祉士養成校の実習生を受け入れている実習施設（6施設）の職員」41人に対し質問紙による調査を依頼した。回収は、実習巡回の最終日に、実習担当者より封筒に入れた調査票を回収した。回収率は100%であった。

(2) データ収集期間

① 2012（平成24）年5月29日～平成24年8月28日（施設または訪問介護事業所に勤務する職員）

② 2012（平成24）年7月23日～平成24年9月16日（介護福祉士養成校の実習生を受け入れている実習施設の職員）

(3) 調査内容

調査票は、「施設または訪問介護事業所に勤務する職員」及び「介護福祉士養成校の実習生を受け入れている実習施設の職員」については同じ質問紙を使用している。そのため、それぞれのデータ収集期間及び、データ収集方法について、結果で記載すると共に、それ以外の結果については、「福祉の職員に対するアンケート」として合計して集計し、記載している。

調査票の質問項目は、基本属性として性別、

表 1 回答者の属性

項 目	属 性	人数、割合 (%)
男女比	女性 男性 不明 合計	64 人 (66.7%) 31 人 (32.3%) 1 人 (1.0%) 96 名
年 齢	平均年齢 女性 男性 全体	41.8 歳 33.5 歳 39.1 歳
職 種	介護職員 生活相談員 介護支援専門員 その他	89 人 (92.7%) 5 人 (5.2%) 1 人 (1.0%) 1 人 (1.0%)
勤務先	特別養護老人ホーム 老人保健施設 訪問介護事業所 グループホーム 病院 (療養型) 病院 デイサービス デイケア その他	20 人 (20.8%) 31 人 (32.3%) 6 人 (6.3%) 7 人 (7.3%) 8 人 (8.3%) 1 人 (1.0%) 7 人 (7.3%) 7 人 (7.3%) 9 人 (9.4%)
勤務年数	平均勤務年数 1 年未満 1 年以上 3 年未満 3 年以上 5 年未満 5 年以上 10 年未満 10 年以上	5 年 5 ヶ月 3 人 (3.2%) 17 人 (17.9%) 39 人 (41.1%) 19 人 (20.0%) 17 人 (17.9%)
介護福祉士の 有無	介護福祉士資格有り 介護福祉士資格無し	40 人 (41.7%) 56 人 (58.3%)
介護福祉士の 取得方法	介護福祉士養成校卒業し取得した人 旧カリキュラムで卒業した人 新カリキュラムで卒業した人 国家試験合格による資格取得者	20 人 13 人 (32.5%) 7 人 (17.5%) 20 人 (50.0%)
福祉関連の資格 (複数回答可)	ホームヘルパー 2 級 ホームヘルパー 1 級 介護職員基礎研修 看護師 社会福祉士 社会福祉士受験資格 社会福祉主事任用資格 認知症ケア専門士 レクリエーションインストラクター 福祉レクリエーションワーカー 精神保健福祉士 介護支援専門員 その他	56 人 (58.3%) 2 人 (2.1%) 5 人 (5.2%) 1 人 (1.0%) 5 人 (5.2%) 2 人 (2.1%) 10 人 (10.4%) 2 人 (2.1%) 4 人 (4.2%) 3 人 (3.1%) 2 人 (2.1%) 1 人 (1.0%) 2 人 (2.1%)

年齢、現在の職種、勤務先、介護・福祉・医療職としての合計経験年数、介護福祉士資格の有無、介護福祉士資格の取得方法について調査した。

①介護福祉士養成校で学んだレクリエーションの知識が現場でどのくらい役立っているか、介護福祉士以外で保有している福祉関連の資格、レクリエーションの必要性、レクリエーションの課題、介護福祉士養成校の学生について養成校で学んでほしい事、養成校で学んでほしい事の中で一番大切だと思うもの、勤務先での認知症高齢者の方を意識したレクリエーションの実施の有無、認知症高齢者を意識したレクリエーションの種類、認知症の方へのレクリエーションの効果について調査した。

②勤務先でのレクリエーション活動内容について実施の有無（継続型レクリエーションとしてラジオ体操、体操、嚙下体操、風船バレー、歌、カラオケ、楽器演奏、計算、クイズ、塗り絵、書道、紙芝居、読書、ボーリング、輪投げ、球入れ、じゃんけんゲーム、その他）（単発型レクリエーションとして、散歩、外出、料理、喫茶店、運動会、夏祭り、敬老会、その他）、頻度、1回の時間についても調査した。

V. 倫理的配慮

S県にあるT介護福祉士養成校の学校長及び調査対象者に、研究の目的、方法、倫理的配慮について口頭と文書で説明し、実施の許諾及び同意を得た。

VI. 結果

1. 回答者の属性

属性として女性が66.7%を占めており女性が多かった。福祉の職場においては男性よりも女性が多い傾向があり、本研究についても女性が多く回答していたと考える。

現在の職種として介護職員が92.7%と9

割を超えており、回答者はそのほとんどが介護職員であった。

勤務先として、特別養護老人ホームが20.8%、老人保健施設が32.3%と、二つの施設に勤務している人を合わせると5割を超えていた。

経験年数では、3年以上5年未満の人が41.1%を占めており、全体の中で3年以上の勤務経験を持つ人が8割以上を占めていた。

介護福祉士資格の有無については、介護福祉士資格無しが58.3%を占めていた。本研究では、介護福祉士国家試験の実技免除のための講習会である介護技術講習会参加者にアンケートを取っている関係で、介護福祉士資格無しが多いと思われる。

介護福祉士資格取得者の取得方法として、介護福祉士養成校を卒業した人と国家試験合格による資格取得者は、共に20人で同じ割合であった。

保有している福祉関連の資格として、ホームヘルパー2級資格を取得している人が全体の58.3%と約6割近くを占めていた。現状では、介護職として仕事をする際の基礎資格となっていることから、取得している人が多いのではないかと考える。

2. アンケートについて

(1) 介護福祉士養成校を卒業し介護福祉士資格を取得した人20人に対し、養成校で学んだレクリエーションの知識がどの程度現場で役立っているのかについて調査した。

役立っている9人(45.0%)、どちらかというと役立っている6人(30.0%)、どちらかというと役立っていない3人(15.0%)、役立っていない2人(10.0%)であり、学校で学んだレクリエーションを何らかの形で役立てている人が多かった。(図1)

役立っている、またはどちらかというのと役立っている理由として、「進行の仕方やコミュニケーション技術・知識などを学ぶ

ことが出来た」「レクリエーションの中で、出来る事と出来ないことの理由が理解できた」という回答であった。

また、役立っていない、またはどちらかというと役立っていない理由として、「生活者に対し、ゲームなどをする必要性を感じないし、本人も希望しない」「施設でレクリエーションを行うと反応があまりない」「学校で学んだレクリエーションが、高齢者向けの内容ではなかった」「訪問介護のため、レクリエーションをやる時間がない」という回答であった。

(2) 介護福祉士の職場において、レクリエーションの必要性について、とても必要 48 人 (50.0%)、必要 46 人 (47.9%)、あまり必要ではない 2 人 (2.1%)、必要ではない 0 人 (0.0%) となっており、福祉の職員は 90% 以上の人が、レクリエーションを必要だと感じていた。(図 2)

(3) レクリエーションの課題について(複数回答可)は、「人手がないため行えない 41 人(42.7%)」、「レクリエーションのアイデアが浮かばない 42 人 (43.8%)」、「いつも同じようなレクリエーションになりマンネリである 64 人 (66.7%)」、「利用者の介護度が高く参加できない 37 人 (38.5%)」、「利用者が希望しない 13 人 (13.5%) その他 13 人 (13.5%)」であり、レクリエーションのアイデアが浮かばないため、いつも

同じようなレクリエーションになることを課題とする人が多かった。

(図 3)

その他の内容として、「利用者の介護度の違いや認知症があるため、集団でのレクが難しい 4 人」、「レクリエーションを集団で行うことが多いが、個別でもいいのではないか 3 人」、「個別でのレクリエーションを行いたい、人手がなく対応が難しい 2 人」、「老人保健施設でのレクリエーションは、余暇として提供すべきかリハビリにつなげたレクリエーションにするべきか 1 人」、「場当たりのレクリエーションになりがち 1 人」、「他職員が協力的でないことがある 1 人」、「レクに割ける時間が少ない 1 人」という回答が見られ、集団レクリエーションや個別レクリエーションについての課題があった。

(4) 養成校の学生について、学校で学んでほしいことについて(複数回答可)は、介護技術 75 人 (78.1%)、利用者とのコミュニケーション 71 人 (74.0%)、医学の基礎的知識 50 人 (52.1%)、介護計画についての知識(個別援助計画、ケアプランの作成) 40 人 (41.7%)、社会福祉に関する制度の知識(介護保険の知識など) 27 人 (28.1%)、多職種との連携について 35 人 (36.5%)、レクリエーションの知識 46 人 (47.9%)、レクリエーションの技術 42 人 (43.8%)、

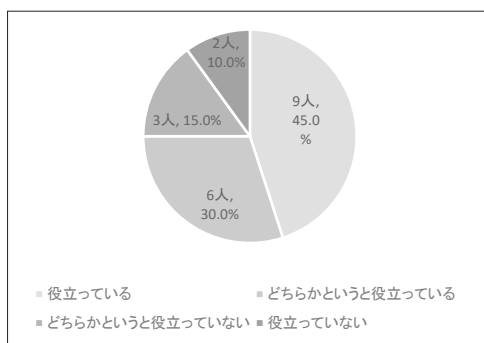


図 1 養成校で学んだレクリエーションの知識

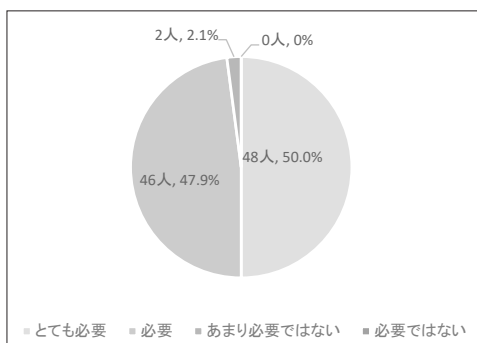


図 2 レクリエーションの必要性

認知症高齢者に関する知識 65 人 (67.7%)、認知症高齢者に対する援助技術 60 人 (62.5%)、介護に関する倫理 35 人 (36.5%)、その他 8 人 (8.3%) となっており、介護技術やコミュニケーション、医学の知識、認知症高齢者に関する知識・援助方法を学んでほしいと回答している人が多かった。レクリエーションについては、4 割以上の人が、学校で学んでほしいと回答していた。(図 4)

その他の内容としては、「リハビリの知識」、「高齢者・障害者に対する知識や心理」、「昭和の歴史や文化史」、「全部大切であり技術や知識など基本を身に付けてほしい」、「社会人になるための心がまえ」、「高齢者に対する真摯な態度」について回

答があった。

(5) 介護福祉士養成校の学生について養成校で学んでほしいことの中で一番大切だと思うものは何かとの質問に対し、介護技術 25 人 (26.0%)、利用者とのコミュニケーション 31 人 (32.3%)、医学の基礎的知識 5 人 (5.2%)、介護計画についての知識 (個別援助計画、ケアプランの作成) 4 人 (4.2%)、社会福祉に関する制度の知識 (介護保険の知識など) 1 人 (1.0%)、多職種との連携について 1 人 (1.0%)、レクリエーションの知識 1 人 (1.0%)、レクリエーションの技術 2 人 (2.1%)、認知症高齢者に関する知識 7 人 (7.3%)、認知症高齢者に対する援助技術 3 人 (3.1%)、介護に関する倫理 11 人 (11.5%)、その他 3 人 (3.1%)

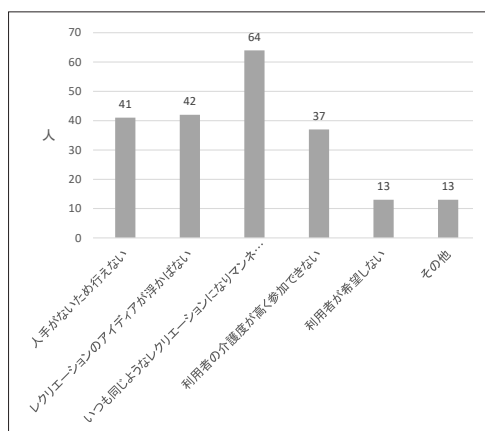


図 3 レクリエーションの課題

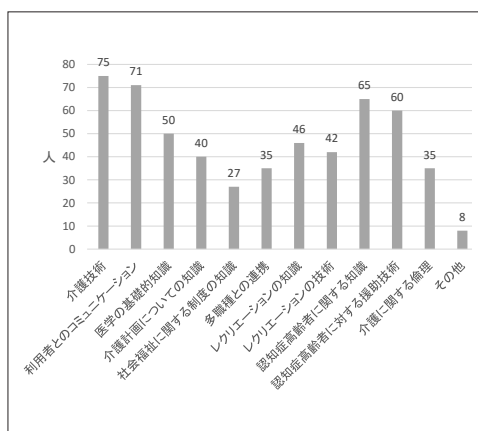


図 4 養成校の学生に学んでほしいこと

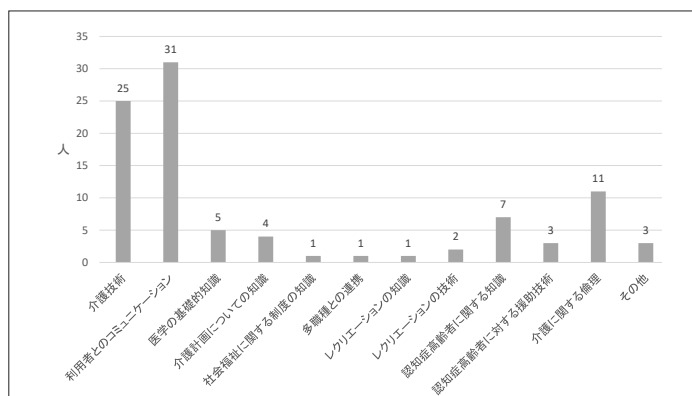


図 5 養成校の学生が学んでほしいことの中で一番大切だと思うもの

となっている。

一番大切だと思うことについては、1番に利用者とのコミュニケーション31人(32.3%)であり、2番目に介護技術25人(26.0%)、3番目に介護に関する倫理11人(11.5%)となっている。(図5)

(6) あなたが勤務する施設では、認知症高齢者の方を意識したレクリエーションを行っているかについての質問に対して、「行っているが51人(53.1%)」、「行っていないが32人(33.3%)」「未回答が13人(13.5%)」であり、認知症高齢者の方を意識したレクリエーションを行っている施設が5割を超えていた。(図6)

また行っていなかった人32人に、その理由を記載してもらった所、「勤務する施

設に認知症利用者の人数が少ない5人」、「訪問介護なのでレクリエーションの時間がとれない3人」、「認知症の方に合うレクリエーションの知識がない2人」、「レクリエーションの意義が明確でない2人」、「特に認知症の方に対するレクリエーションを意識していない2人」、「人手が足りない2人」、「介護度が高く参加できない2人」との回答があった。

また、認知症高齢者の方を意識したレクリエーションを行っている51人に対し、認知症高齢者の方を意識したレクリエーションの種類を自由回答にて調査したところ、「回想法、5人(9.8%)」(昔の歌、回想法)、「音楽19人(37.3%)」(音楽療法、カラオケ、演奏、歌)、「ゲーム7人(13.7%)」

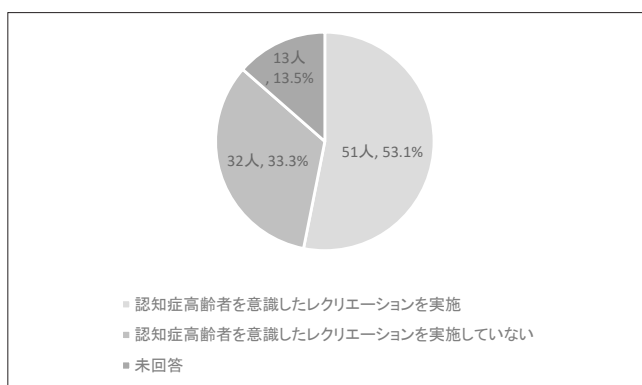


図6 認知症高齢者を意識したレクリエーション実施の有無

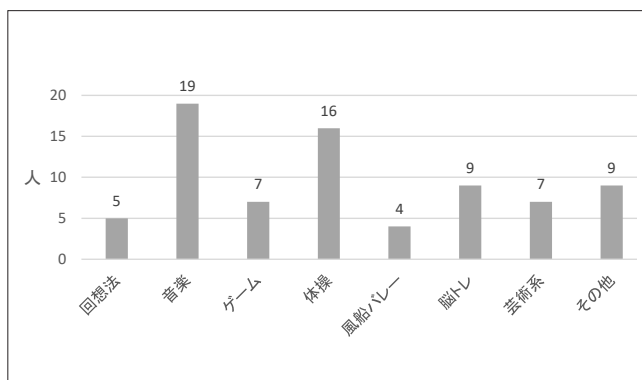


図7 認知症高齢者を意識したレクリエーションの種類

表2 職場で行っているレクリエーション活動について（複数回答可）

レク種目	人数	%	平均時間 / 分	平均月回数
ラジオ体操	50 人	52.1%	9.1 分	24.4 回 / 月
体操	67 人	69.8%	17.0 分	24.2 回 / 月
嚙下体操	56 人	58.3%	10.7 分	27.2 回 / 月
風船バレー	47 人	49.0%	30.5 分	4.4 回 / 月
歌	63 人	65.6%	36.2 分	6.7 回 / 月
カラオケ	51 人	53.1%	41.1 分	6.4 回 / 月
楽器演奏	28 人	29.2%	回答なし	3.3 回 / 月
計算	31 人	32.3%	22.1 分	11.0 回 / 月
クイズ	36 人	37.5%	21.2 分	5.7 回 / 月
塗り絵	45 人	46.9%	34.4 分	7.2 回 / 月
書道	52 人	54.2%	43.6 分	3.1 回 / 月
紙芝居	9 人	9.4%	43.6 分	1.2 回 / 月
読書	13 人	13.5%	33.3 分	9.4 回 / 月
ボーリング	35 人	36.5%	34.4 分	2.3 回 / 月
輪投げ	28 人	29.2%	34.3 分	2.1 回 / 月
球入れ	25 人	26.0%	33.3 分	3.1 回 / 月
じゃんけんゲーム	11 人	11.5%	26.3 分	28.0 回 / 月
散歩	48 人	50.0%	22.3 分	8.0 回 / 月
外出	28 人	29.2%	102.4 分	1.2 回 / 月
料理	43 人	44.8%	54.8 分	2.6 回 / 月
喫茶店	42 人	43.8%	67.5 分	3.0 回 / 月
運動会	52 人	54.2%	36.9 分	1.1 回 / 年
夏祭り	69 人	71.9%	142.6 分	1.0 回 / 年
敬老会	58 人	60.4%	96.2 分	1.0 回 / 年

（シーツバレー、物送りゲーム、ボーリング、じゃんけん、麻雀、オセロ）、「体操 16 人（31.4%）」（リハビリ体操、ラジオ体操、嚙下体操、体操）、「風船バレー 4 人（7.8%）」、「脳トレ 9 人（17.6%）」（脳トレ、しりと、ことわざ、クイズ、計算プリント、パズル）、「芸術系 7 人（13.7%）」（製作、貼り絵、習

字、茶話会）、「その他 9 人（17.6%）」（アロマ、折り紙、踊り、ビデオ、映画、読書、アニマルセラピー、食事作り、タッチセラピー）との回答であり、「音楽」、「体操」が最も多かった。（図 7）

（7） 認知症レクリエーションの効果について、どのような効果があると感じるかにつ

いて自由回答による調査をした所、「回想法により昔を思い出す効果 10 人」、「笑顔が見られる 9 人」、「気分転換 8 人」、「身体を動かす事でリハビリ効果がある 7 人」、「気分を落ち着かせる 5 人」、「楽しみ 4 人」、「話をする 4 人」、「認知症の進行予防 3 人」、「感情表出 2 人」、「生きがい 2 人」、「口腔機能向上 1 人」、「BPSD の軽減 1 人」、「夜間良眠 1 人」であり、回想法による昔を思い出す効果や、笑顔が見られる効果が多かった。なお、これらの効果については、一つのみを回答するのではなく、これらを組み合わせて回答していた。

- (8) 職場で行っているレクリエーション活動について、その頻度、1 回の実施時間、1 月あたりの実施回数、実施者について回答した。なお、レクリエーションは、日常定期的に行っているレクリエーションを継続型、不定期に行っているものは、単発型として分類した。(表 2)

継続型のレクリエーションの「体を動かすレクリエーション」として、「ラジオ体操」、「体操」、「嚙下体操」、「風船バレー」、音楽系のレクリエーションとして、「歌」、「カラオケ」、「楽器演奏」、頭脳系のレクリエーションとして、「計算」、「クイズ」、芸術系のレクリエーションとして、「塗り絵」、「書道」、「紙芝居」、「読書」、ゲーム系のレクリエーションとして、「ボーリング」、「輪投げ」、「球入れ」、「じゃんけんゲーム」これらに分類されない「その他」とした。また、単発系のレクリエーションとして、「散歩」、「外出」、「料理」、「喫茶店」、「運動会」、「夏祭り」、「敬老会」、これらに分類されない「その他」とした。

なお、これらのレクリエーションの分類については、平成 24 年 3 月に T 介護福祉士養成校の介護福祉科を卒業した学生に、実習Ⅱ（最終実習）で、どのようなレクリエーションを行ったのかについて事前にア

ンケートを実施し、そこで挙げられたレクリエーションについて分類しており本研究でもその分類を用いている。

VII. 考察

養成校を卒業し介護福祉士を取得した人について、養成校で学んだレクリエーションの知識がどの程度、福祉の現場で役立っているのかについては、「何らかの役に立っている人が 15 人 (75.0%)」であり、福祉の職場に就職した後、養成校で学んだレクリエーションの知識を何らかの形で役立てていることが分かった。

福祉の職場において、レクリエーションの必要性は、「とても必要、必要を合わせて 94 人 (97.9%)」であった。この結果から、ほとんどの人がレクリエーションを必要だと感じていると言える。

レクリエーションの課題について 1 番多いのは、「いつも同じようなレクリエーションになりマンネリである 64 人 (66.7%)」、2 番目に「レクリエーションのアイディアが浮かばない 42 人 (43.8%)」であり、レクリエーションの知識が足りずにレクリエーションを考えることに困難がある人が半数以上を占めていることが分かる。

また 4 番目に「利用者の介護度が高く参加できない 37 人 (38.5%)」であり、施設を利用している利用者は、何らかの障害や困難を抱えており、そのためレクリエーションに参加する事が難しい人が約 4 割を占めている。

その他として、「利用者の介護度の違いや認知症があるため集団でのレクレクリエーションが難しい 4 人」であり、何らかの障害や困難がある利用者の心身の状態の違いから集団で行うレクレクリエーションを行うことが難しいという事が言える。

その反面、「レクリエーションを集団で行う事が多いが、個別でもいいのではないかと 3 人」という回答もあり、従来のように集団で

レクリエーションを行うよりも、その人の状態や希望に沿ったレクを行う個別レクリエーションを行いたいとの課題がうかがえる。しかし、個別レクリエーションを行う上では、課題として3番目に多かった、「人手がないため行えない41人(42.7%)」や、「個別でのレクリエーションを行いたいが、人手がなく対応が難しい2人」というように、一人ひとりに対応していく個別レクリエーションは人手が必要であり、その対応が難しいという課題もうかがえる。

以上のことから、福祉の職場においてレクリエーションの知識・技術は必要だが、それが足りずにマンネリ化したレクリエーションに終始してしまい、困っている状況が分かった。

また、レクリエーションの対象者の心身の状況がそれぞれ違うことから、今までのような集団でのレクリエーションでは対応が困難であり、それぞれの状況にあった、個別のレクリエーションの実施が必要である。

養成校の学生について、学校で学んでほしいことについて1番目に「介護技術75人(78%)」、2番目に、「利用者とのコミュニケーション71人(74%)」であった。そして4番目に「認知症高齢者に関する知識65人(67.7%)」と「認知症高齢者に対する援助技術60人(62.5%)」であり、認知症高齢者に対する知識や技術を重要と考えている人が多い事が分かる。新カリキュラムにおいて、「認知症の理解」という科目が新しく導入されており、介護福祉士にとって、今後ますます、認知症高齢者に関する知識・技術が必要であることがうかがえる。

そしてレクリエーションについては、養成校の学生に学校で学んでほしいことの中で、「レクリエーションの知識46人(47.9%)」、「レクリエーションの技術42人(43.8%)」が重要と考えており、新カリキュラムにおいて介護福祉士養成の科目からレクリエーション科

目は無くなったにも関わらず、福祉の職場で働く職員は、介護福祉士教育にとってレクリエーションが重要であり、養成校で学んでほしいと考えていることが分かる。

福祉の現場において、認知症高齢者の方を意識したレクリエーションを行っているかについては半数以上の人が行っていると答えており、認知症の方に関するレクリエーションが介護福祉の職場において必要であると考えられる。また具体的内容として、1番目に「音楽19人(37.3%)」、2番目に「体操16人(31.4%)」、3番目に「脳トレ9人(17.6%)」となっており、認知症の方に特別のレクリエーションを行っているというよりも、高齢者の方に合うレクリエーションの中で、認知症があっても参加する事が可能なものを行っていると言える。

認知症高齢者に対するレクリエーションの効果について、福祉の職員がどのような効果があると感じているのかについては、1番目に「回想法により昔を思い出す効果がある10人」と回答しており、続けて、2番目に「笑顔が見られる9人」、3番目に「気分転換8人」と回答している。これらから、認知症レクリエーションの効果は、「回想法を用いて昔の事を思い出す事で、気分転換され、笑顔が見られる効果がある」と福祉の職員は考えていると言える。

以上の調査結果から福祉の現場では、介護福祉士養成校において無くなってしまったレクリエーションについての知識や技術は必要であり、今後は認知症などその人の状態や希望に沿った個別レクリエーションの知識・技術が求められることが明らかとなった。

しかし人材不足の現状や、レクリエーションの知識・技術が不足している現状では、個別レクリエーションの実施は難しいと考える。

今後は介護福祉士養成校でのレクリエーション教育の継続や、福祉の現場においてレ

クリエーションに関する研修を定期的に取り入れるなど、新しい知識・技術を得る機会を提供していく事も必要ではないか。

そのうえで地域住民やボランティアによる、レクリエーションや交流の機会をさらに増やすことで、利用者がいきいきと楽しみや生きがいを持って生活していけるよう、「生活の快」を支援していくことが可能となると考える。

介護福祉士にとって必要な知識・技術であるレクリエーションを、介護福祉士養成教育の中でどのように組み込み、実践で活かしていくのかを、今後も研究を通して明らかにしていくと共に、今後より重要性が増すと考えられる、認知症高齢者に対するレクリエーション実践のあり方や課題についても、さらに明らかにしていきたいと考える。

VIII. 研究の限界及び今後の課題

本研究では福祉施設に勤務している職員に質問紙によるアンケート調査を行い、認知症高齢者を対象としたレクリエーションについて調査を行った。しかし実際に、認知症高齢者の方にレクリエーションを行った際の、課題についての項目は設定しておらず、本研究では明らかにならなかった。

認知症高齢者は今後さらに増加すると予想されており、認知症の進行予防に有効であると言われている音楽療法や回想法を含めたレクリエーションについて研究していくことは大変重要である。そのため今後の研究では、認知症高齢者に対するレクリエーション実践のあり方やその課題についても明らかにしていきたいと考える。

また今後、個別レクリエーションが求められるが、社会資源としてのボランティアの活用や地域住民との交流についても現状や課題を考察することで、利用者が望む生活の実現につなげることができると考える。今後の課題としたい。

引用文献

- 1) (財) 日本レクリエーション協会編 『レクリエーション支援の基礎—楽しさ・心地よさを活かす理論と技術—』, (財) 日本レクリエーション協会, p.10,2009
- 2) (財) 日本レクリエーション協会編 『レクリエーション支援の基礎—楽しさ・心地よさを活かす理論と技術—』, (財) 日本レクリエーション協会, p.22,2009
- 3) 垣内芳子・大場敏治・蘭田碩哉編 『介護福祉士選書・6 改訂 レクリエーション指導法』, 建帛社, p.17,1994
- 4) 蘭田碩哉・千葉和夫・小池和幸・浮田千枝子編, (財) 日本レクリエーション協会監修 『福祉レクリエーション総論』, 中央法規出版, p.119,2007
- 5) (財) 日本レクリエーション協会・日本レクリエーション協会公認指導者養成課程認定校研究連絡会議・全国福祉レクリエーション・ネットワーク「レクリエーション協会公認資格を持つ介護福祉士へのアンケート調査結果報告書—求められる介護福祉士像に向けた養成カリキュラム・シラバスの改善、改良への寄与を目指して—」, (財) 日本レクリエーション協会, p.1-24,2006
- 6) 松永敬子 「介護福祉士におけるレクリエーション援助の実態に関する研究—介護福祉士養成校と養成校を卒業した介護福祉士に注目して—」『自由研究』21号, p.1-11, 1997
- 7) 中島智子 「介護福祉士養成課程において「福祉レクリエーション」を学ぶ事の意義—福祉現場職員に対する意識調査結果から—」,『文化女子大学長野専門学校研究紀要』第2号, p.45-51,2010

